

「万葉集」は、古代人のドキュメンタリー
～いま「万葉集」が面白い～

プロデューサー 小河原正己（昭和34年卒）
（NHK「日めくり万葉集」制作）

はじめに～ひとこと

本日「万葉集」をテーマにお話をさせてもらうことに一番驚いているのが、他でもありません、この私本人です。中学・高校以来国語とりわけ古文は大の苦手、というより大嫌いな科目でした。NHKでテレビの仕事をするようになってからも、番組作りはドキュメンタリー志向で、「万葉集」などについては無知蒙昧、縁もゆかりもありませんでした。

ところが、定年退職後の頼まれ仕事としてやむなく引き受けたのが「日めくり万葉集」…そんな私に思いがけないことが起こります。ある日突然「万葉集」の魅力にとり憑かれ、以来すっかりはまってしまったのです。全くの門外漢のプロデューサーを、自称「万葉集の宣伝係」に変えさせた「万葉集の魅力とは？」。「万葉集」に一目惚れしたプロデューサーとして、「いま、万葉集の何が面白いのか？」を解き明かすことができたかと願っています。

「万葉集」をひもとくのは、いまからでも遅くはありません。「万葉集、いまでしょ!」(?)
(ひもとくまでもありません。ネットで「万葉集 (歌番号)」を打ち込み検索してください)



音楽朗読劇「万葉ファンタジスタ大伴家持～いやしけよごと」は、
波乱に富んだ家持の生涯を歌から読み解いたファンタジック・ドキュメンタリー
お芝居の神さまが舞台に舞い降り、ちょっと微笑んでくれました

家持が最後に詠んだ、万葉集最後の歌(巻20・4516)

あらた し よ ごと い や し け よ ごと
新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いや重け吉事(伊夜之家餘其騰)

#1 オープニング

「万葉集」には、山梨で詠まれた歌があるか？

(1) 「万葉集」は、6世紀から8世紀にかけて編まれた現存する日本最古の和歌集。

九州は鹿児島から東北宮城まで、天皇、貴族から下級官人、農民など幅広い階層で詠まれた全20巻4516首の歌集である。まさに世界に誇る文化遺産と言っても過言ではない。そんな万葉集を、毎朝一人の選者が、「日めくりカレンダー」をめくるようにひもとき、「一日一首」を選んで歌への熱き思いを語ってもらう5分のミニ番組シリーズが「日めくり万葉集」である。放送は2012年3月に終了したが、それまでに全480本を制作、選者として出演いただいた各界を代表する文化人の数が168人、取り上げた歌の数は457首に上った。選者の皆さんが、万葉集を面白がって話してくれたのが印象的だった。そんな「日めくり万葉集」を、最も面白がって見ておられたのが、天皇皇后両陛下だった。両陛下が、毎朝楽しみに欠かさず視聴する番組としてニュースになったのである。実際選者の一人、作家のリービ英雄さんとナレーターの女優檀ふみさんが皇居に招かれ、「万葉集」について夜が更けるまで親しく語り合われたのだ。その時、檀さんに両陛下が「一番好きな万葉秀歌」をお聞きしてもらったところ、天皇が選ばれた歌が、あの有名な柿本人麻呂の（巻1・48）「^{ひむかし}東の^{かげろひ}野に^{なかつすめらみこと}炎の^{かへり}立っ見えて^{かへり}反り見すれば月傾きぬ」皇后が選ばれた歌が、中皇命の（巻1・4）の歌だった。また天皇家の長女黒田清子さんの旧名「紀宮清子」は、山部赤人が「**紀伊**」に旅をした時の長歌（巻6・917）の一節「**清き渚に**」から選ばれたものであることも明かされた。

(2) 「万葉集」には、武蔵国など東国12カ国で詠まれた東歌等が300首以上あるが、その中に甲斐国は含まれていない。霊峰富士の歌も11首あるが、いずれも東海道から詠まれたもの。ただし、次の1首は、題詞では駿河国となっているが、歌の内容から山梨県鳴沢村を詠ったのでは、という説もある。鳴沢村にはその歌碑が建てられている。

① 作者未詳（巻14・3358）

さ寝らくは
玉の緒ばかり
恋ふらくは
富士の高嶺の
鳴沢の如

共寝することは
玉の紐ほどに短く
別れて恋しいことは
富士の鳴沢のように
激しいことよ



鳴沢村にある歌碑

万葉を代表する歌人の収録歌数と各年代（←---→ 推定）

▼(645)大化改新 ▼(672)壬申の乱 ▼(710)平城京 平安京(794) ▼(806)

① 大伴家持 473首

② 柿本人麻呂 449首（歌集含む）

③ 坂上郎女 84首

④ 大伴旅人 78首

⑤ 山上憶良 76首

⑥ 山部赤人 50首

額田王 12首

万葉集、世に出る

#2 ドキュメント その1

富士山は噴煙を上げ、富士五湖は三湖だった

- (1) 昨年世界文化遺産に登録され注目を集めた富士山。万葉集の富士山を詠んだ歌 11 首の中で、最もよく知られ愛唱されている歌の一つ。

② 山部宿禰赤人の不尽山を望める歌 (巻 3・318)

田子の浦ゆ	田子の浦を通り
うち出でて見れば	眺めのよいところに出て望み見ると
ま白にそ	真っ白に
富士の高嶺に	富士の高嶺に
雪は降りける	雪が降り積もっているよ



- (2) 歌の作者山部赤人が望み見た富士の山は、今私たちが見ている富士山とは違っていた。万葉の時代、富士山は、「不尽山」と表記され「神代の昔から活動が続ける永遠に命の尽きない山」だった。つまり、当時富士山は噴煙を上げ、溶岩が流出して川をせき止めるなど、火山活動をしていたのである。その他にも、「不二」、「不死」などの表記が見られるが、「富士」と表記されるようになるのは平安時代になってからのこと。高橋虫麻呂の、次の長歌には、当時の富士の姿と万葉びとの富士に対する憧れや畏敬などが読み込まれている。

③ 不尽山を詠める歌 高橋虫麻呂 (巻 3・319)

なまよみの 甲斐の国	甲斐の国と
うち寄する 駿河の国と	駿河の国との
こちごちの 国のみ中ゆ	両方の国の真ん中から
出で立てる 富士の高嶺は	聳え立っている富士の高嶺は
天雲も い行きはばかり	天雲も進むのをためらい
飛ぶ鳥も 飛びも上らず	飛ぶ鳥も飛び上がらない
燃ゆる火を 雪もち消ち	燃える火を雪で消し
降る雪を 火もち消ちつつ	降る雪を火で消しつつ
言ひも得ず 名づけも知らず	言ひようも名付けようもないほど
くすくも います神かも	霊妙にまします神である
石花の海と 名づけてあるも	せの海と名付けてある湖も
その山の つつめる海ぞ(後略)	この山が抱く海なのだ

歌体

長歌

5・7・5・7...5・7・7

短歌

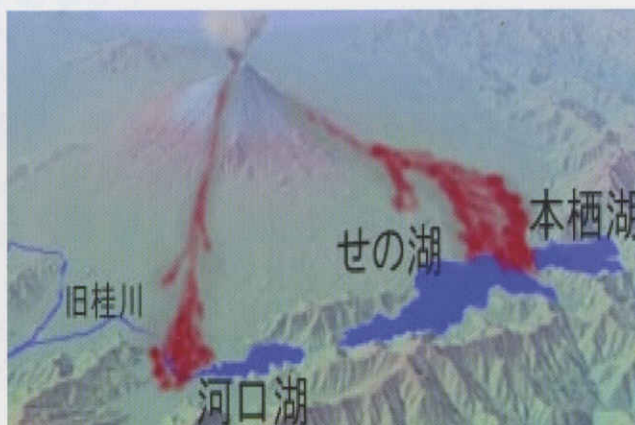
5・7・5・7・7

せどうか 施頭歌

5・7・7・5・7・7

- (3) 甲斐の国の枕詞「なまよみの」は、生黄泉或いは半黄泉の意。「甲斐」は峽、貝、交ひ等の諸説があるが、もっとも有力な説は「現生と黄泉の国が交差する国」とされる。枕詞「うち寄する」は「波打ち寄する」駿河の国の意と末尾の「する」の音と「するが(駿河)」にかけている。

また、古来富士山は噴火を繰り返してきたことはよく知られているが、万葉の当時は「燃ゆる火」とあるように、その頂からは噴煙が上がり、「(古)せの海」が溶岩流により分断され、湖は3湖に分かれていた。富士五湖になったのは、万葉集が完成して約100年後の貞観の時代の一連の大噴火、大地震、大津波が起こった時のことである。



#3 ドキュメント その2

歌に残された天皇皇后、権力者たちの素顔

- (1) 「日めくり万葉集」の選者の一人、政治学者の原武史さんは、天皇や皇室など政治思想史の研究を専門にしている。その原さんは、天皇皇后と歌について、次のように語っている。「古来、天皇皇后は、歌を作られることが多い。明治天皇は、9 万首もの歌を作られているはずです。しかし、歌以外には、天皇皇后ともに、自ら書き残したものはほとんどありません。とりわけ、皇后の場合は歌しか残されていません。従って、皇后について考察する場合、歌はとても重要になります。それだけに、私の研究にとって、万葉集はとても貴重な資料でもあるのです」

なお、原さんは、現在歴代の皇后が詠んだ歌を読み解き、雑誌「群像」に「皇后考」を連載中である。

- (2) 万葉集中最古の歌を残したのが、仁徳天皇の皇后、磐姫皇后で、4 首の歌を残している (5 世紀前半)。磐姫皇后は「古事記」、「日本書紀」によると異常なくらい妬み深く、わが国を代表する嫉妬女とさえ言われるような女性だった。

曰く「他の妻妃たちが、天皇に対して普段と違った物言いをする」と『足もあかがに』(地団太ふんで)妬んだ「天皇の浮気を知った皇后は、再三迎えに来た天皇に逢うことも拒絶し、そのまま夫を許すことなく 5 年後にその生涯を終えた」など……

しかし、万葉集に残された 4 首の歌はいずれも夫への恋歌で、夫である天皇を献身的に愛した、つつましくて、しおらしい女性だった一面が見てとれる。

④ 磐姫皇后 (巻 1・85)

君が行き
日長くなりぬ
山尋ね
迎へか行かむ
待ちにか待たむ

大君が行幸に出られて
ずいぶんと日がたちました
山道を辿って
お迎えに行こうか
それともこのままじっと
待っていようか

仁徳天皇 (5 世紀前半)

第 16 代天皇、大和国家最盛期の天皇。人家の竈から炊煙が立ち上っていないことに気づいて租税を免除する等、仁政を行う。陵は、世界最大の前方後円墳で知られる。

- (3) 聖徳太子は、幼少時から聡明で仏法を尊んだと言われ、様々な逸話、伝説が残されている。万葉集には、上宮聖徳皇子作として、歌が1首残されているが、そこには、その治世と同じく、信仰心厚く、慈愛に満ちた太子の素顔がそのまま表れている。

⑤ 聖徳太子 (巻3・415)

家 ^{いも} にあらば	家にいたならば
妹 ^{いも} が手まかむ	妻の手枕で休むだろうに
草枕	(草枕)
旅 ^{こや} に臥 ^ふ やせる	旅先で倒れている
この旅 ^{たびと} 人あはれ	この旅人は、ああいたわしい

聖徳太子 (574~622)

推古天皇の摂政として、蘇我氏とともに国政の改革にあたる。冠位十二階の制、十七条憲法の制定、仏教の興隆に尽力し、四天王寺、法隆寺を建立した。

- (4) 中臣鎌足(後の藤原鎌足)は、^{なかのおおえのおうじ}中大兄皇子(後の天智天皇)と共に大化の改新を成し遂げた後、天智天皇の腹心として最高権力者の地位に昇りつめ、その後摂関家となる藤原一族の始祖となった。万葉集には2首の歌が残されており、その内の1首は、時の権力者が、あたかも宝物を手に入れた子どものように、天皇にお仕えする采女^{うねめ}を手に入れた喜びを露わにした歌となっている。

⑥ 藤原鎌足 (巻2・95)

われはもや	どうだ、このおれはな
安見 ^{やすみこ} 見 ^こ 得 ^こ たり	安見兒を手に入れたぞ
皆 ^{みな} 人の	誰もが皆手に入れかねている
得 ^{えかて} 難 ^{がた} にすといふ	という評判の安見兒を
安見 ^{やすみこ} 見 ^こ 得 ^こ たり	おれは手に入れたぞ

大化の改新 (645)

聖徳太子の死後勢力を強めた蘇我氏を、中大兄皇子と中臣鎌足はともに滅ぼし、年号を大化と定め、改新の詔を出した。律令制に基づく中央集権国家の始まりである。

- (5) 天智天皇の弟、^{おおあまのみこ}大海人皇子(後の天武天皇)は、万葉集に5首しか歌を残していないが、かつては自分の妻だった額田王と並ぶ万葉集初期のスターである。愛する額田王を、兄の天智天皇に奪われた大海人皇子が、薬狩りの後の宴席で天智天皇から請われて作った「あかねさす 紫野行き 標野^{しめの}行き 野守は見ずや 君が袖振る」(額田王、巻1・20)と「紫の にはへる妹を 憎くあらば 人妻^{いも}ゆゑに われ恋ひめやも」(大海人皇子、巻1・21)という二人の応答歌は、あまりに有名である。

天智天皇の死後、壬申の乱で皇位争いに勝利した大海人皇子は即位して天武天皇になり、6人の皇子を連れて吉野に行幸した。そこで皇子たちにお互い助け合い相争わないよう「吉野の盟約」を誓わせた時の歌である。しかし、それから数年後、天武天皇が亡くなると、皇位争いが起こり、大津皇子謀反事件の悲劇につながっていく。

⑦ 天武天皇 (巻1・27)

淑 ^よ き人の	昔のよい人が
良 ^よ しとよく見て	よいところだとよく見て
良 ^よ しと言ひ	よいと言った
吉野よく見よ	この吉野をよく見なさい
良 ^よ き人よく見	今のよい人よ、よく見なさい

壬申の乱 (672)

日本古代最大の内乱事件。天智天皇没後、皇太子の大友皇子に対し、天皇の弟、大海人皇子が地方豪族を味方につけ反旗を翻した。反乱者の大海人が勝利し、天武天皇となる。

#4 ドキュメント その3

当時の庶民の暮らしのドキュメンタリー

- (1) 当時の貴族たちの食生活は、米を主食に、鯛（巻 16・3829）、鮪（巻 19・4218）、鮑（巻 11・2798）、鰻（巻 16・3853～4）、蟹、鹿・猪肉、酪・蘇（チーズ等）等山海の珍味と酒など美食三昧、贅沢なものだった。それに対して、農民や特に東国の人々の暮らしは貧しく、家は竪穴式住居、食事は、玄米や麦、稗に塩と青菜の汁だけ、時に口にする酒も糟湯酒だった。貴族たちの優雅な生活は、農民からの搾取によって成り立っていたのである。当時の悲惨な農民たちの暮らしぶりは、山上憶良の有名な長歌「貧窮問答歌」（巻 5・892）に見ることができる。「貧窮問答歌」は、文字通り万葉びとの暮らしのドキュメンタリーであり、憶良は、当代一のドキュメンタリストと言っても過言ではない。

⑧ まず、貧しい人からの問いかけの歌

風^{まじ}雑へ 雨降る夜の
雨^{すべ}雑へ 雪降る夜は
術もなく 寒くあれば
堅塩^{かす ゆき}を 取りつづろひ
糟湯酒^{しわぶ} うち啜ろいて
咳^{せき}かひ 鼻^びびしに
しかとあらぬ 髭^{ひげ}かき撫でて
我^おを除きて 人はあらど
誇^{あさぶすま}ろへど 寒くあれば
麻^{あさ}襦^{かたぎぬ} 引き被り
布^ふ肩衣^{かたぎぬ} 有りのことごと
服^{きそ}襲へども 寒き夜すらを
我よりも 貧^ひしき人の
父母^{めいこ}は 飢^うえ寒^さゆらむ
妻^め子どもは 吟^{うた}び泣^なくらむ
此^この時は 如何^{いか}ににつつか
汝^なが世は渡る

風まじりに雨が降り
その雨にまじって雪も降る
そんな夜はどうしようもなく寒いから
堅塩を少しずつなめては
糟湯酒をすすり
咳をしては鼻水をすすり上げる
たいして生えているわけでもない髭を撫でて
自分より優れた人はおるまいと
自惚れているが、寒いから
麻でつくった夜具をひっかぶり
麻布の半袖をありったけ
重ね着をしてもそれでも寒いこんな夜には
私よりももっと貧しい人の
親は飢えてこごえ
その妻子は力のない声で泣くことになろうが
こういう時には、どうやって
お前は生計を立てていくのか

⑨ この問いに対して、さらに貧しい人が答える歌

天地^{あめつち}は 広^{ひろ}しといへど
吾^{われ}が為^{ため}は 狭^{せま}くやなりぬる
日月^{ひつき}は 明^{あか}しといへど
吾^{われ}が為^{ため}は 照^てりや給^{たま}はむ
人^{ひと}皆^{みな}か 吾^{われ}のみや然^{しか}る
わくらばに 人^{ひと}とはあるを
人^{ひと}並^{なら}に 吾^{われ}も作^{つく}るを
綿^{わた}も無^なき 布^ふ肩衣^{かたぎぬ}
海松^{みづのけ}の如^{ごと} わわけさがれる
かかふのみ 肩^{かた}にうち懸^かけ

天地は広いというが
私にとっては狭くなってしまったのだろうか
太陽や月は明るく照り輝いて下さるとはいうが
私のためには照ってはくださらないのだろうか
他の人も皆そうなのだろうか、それとも
私だけなのだろうか。たまたま人間として生まれ
人並みに働いているのに
綿も入っていない麻の袖なしの
しかも海松のように破れて垂れ下がり
ぼろぼろになったものばかりを肩にかけて

ふせいお まげいお
 伏^ふ塵^{せい}の 曲^ま塵^げの内に
 ひたつち
 直^ち土^{つち}に 藁^{わら}解^{かい}き敷^しきて
 父母^{ふぼ}は 枕^{まくら}の方に
 妻^{つま}子どもは 足^{あし}の方に
 囲^{かまど}み居^いて 憂^さえ吟^{ぎん}ひ
 竈^{かまど}には 火^ほ氣^けふき立てず
 こしき
 甌^{かし}には 蜘蛛^{くま}の巣^す懸^かきて
 飯^い炊^ひく 事^{こと}も忘^{わす}れて
 ぬえ鳥^{とり}の のどよみ居^いるに
 いとのきて 短^みき物^{もの}を
 端^{しもと}きると 云^いえるが如^{ごと}く
 楚^{しよ}取^とる 里^{さと}長^{おさ}が声^{こゑ}は
 寝^ね屋^や戸^どまで 来^き立ち呼^よびひぬ
 斯^かばかり 術^{よの}意^なきものか
 世^よ間の道^{みち} 世^よ間^まを憂^{うれ}しとやきと
 思^{おも}へども 飛^とび立ちかねつ
 鳥^{とり}にしあらねば

つぶれかけた家、曲がって傾いた家の中には
 地べたにじかに藁を解き敷いて
 父母は枕の方に
 妻子は足の方に
 自分を囲むようにして、悲しんだりうめいたり
 かまどには火の気もなく
 甌には蜘蛛の巣がはって
 飯を炊くことも忘れたふうで
 かぼそい力のない声でせがんでいるのに
 「短いものの
 端を切る」という諺と同じように
 鞭を持った里長の呼ぶ声が
 寝室にまで聞こえてくる
 これほどどうしようもないものなのだろうか
 この世の中をつらく耐え難く思うけれども
 飛んで行ってしまうこともできない
 鳥ではないのだから

#5 インターミッション ～ ドキュメント その4

浮気の代償は、懲役刑や鞭打ちの刑

- (1) 大伴家持は 29 歳の時、越^え中国^{ちゆうのく}守^みとして、現在の富山県高岡市に単身赴任するが、部下の一人、記録係の役人尾張少^お昨^{はりのをくひ}が遊^う行^{かれ}女^め婦^{さぶるこ}の左^さ夫^ふ流^{りゅう}に入れ込み、一悶着^{いもんちやく}を起こす。万葉集には、家持が少昨を諫めた歌 4 首が残されているが、次は、その歌の題詞である。

「七出例」に言う「このうちの一か条でも犯せば、ただちに妻を離^{はな}別^{べつ}してもよい。この七条に該当する事実もないのに軽々しく捨てた者は、一年半の徒^{ずけい}刑^{けい}に処する」と。

「三不去」に言う「七出を犯しても、こんな場合は捨ててはならない。違反する者は杖百たたきの刑に処する。ただし妻に姦通と悪疾がある時は捨てることができる」と。

「両妻例」に言う「妻がありながらさらに婚姻した者は一年の徒^{ずけい}刑^{けい}。女子は杖百たたきして離^{はな}別^{べつ}せよ」と。

詔書に言う「義夫節婦をいつくしみたまう」と。

謹んで考えるに、以上の数か条は、世に法を敷く基盤であり、人を徳へと導く源である。したがって義夫の道とは、人情として夫婦は平等とする点にあり、ひとつの家で財産を共有するのが当然である。

どうして古い妻を忘れ
 新しい女を愛する気持など
 あってよかろうか。そこで、
 数行の歌を作り、古い妻を
 捨てる迷いを後悔させよう
 とするものである。

当時の五刑

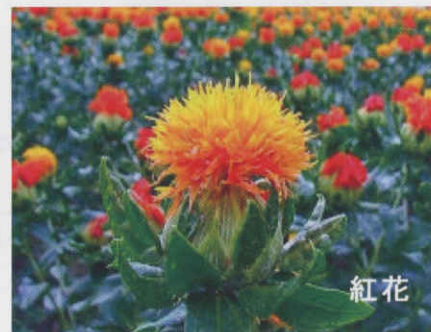
答 ^{ちけい} 刑 ^{けい}	(3 尺 5 寸の鞭で、10～50 回臀部を打つ)
杖 ^{じようけい} 刑 ^{けい}	(鞭より太い杖で、60～90 回臀部を打つ)
徒 ^{ずけい} 刑 ^{けい}	(1～3 年の強制労働をとともなう懲役刑)
流 ^{るけい} 刑 ^{けい}	(罪の軽重により、近流、中流、遠流の 3 種類)
死 ^し 刑 ^{けい}	(罪の軽重により、絞殺と斬殺)

⑩ 史生尾張少咋に教へ諭す歌 大伴家持（巻 18・4107～4110）

あをによし（あおによし）
 奈良にある妹が 奈良にいる妻が
 高々に ひたすら
 待つらむ心 待っているだろう
 しかにはあらじか そういうものではないだろうか

里人の 里人の
 見る目恥づかし 見る目が恥づかしいではないか
 左夫流児に 左夫流という女に
 さどはす君が 迷っているお前の
 宮出後姿 出勤する後ろ姿は

紅は 色鮮やかな紅の衣は
 うつろふもの 褪せやすいもの
 橡の どんぐり染めの
 なれに衣に 着慣れた衣に
 なほ及かめやも やはり及ぶだろうか、かなうはずがない



紅花

左夫流児が 左夫流という女が
 齋し殿に 大切にかしづく御殿に
 鈴掛けぬ 駅鈴も付けない
 駅馬下れり 駅馬が都から下ってきた
 里もどろに さあ里中大騒ぎだ

(2) 他人のことを悪く言うのは、天に唾するも同然……越中国守として単身赴任していた大伴家持自身も、遊行女婦の土師としばしば宴席をともし、相聞歌のやり取りもしていた。一説には、土師は家持の現地妻ではなかったか、とも言われている。

⑪ 遊行女婦土師（巻 18・4067）

二上の 二上の
 山に隠れる 山にこもっている
 ほととぎす ほととぎすよ
 今も鳴かぬか 今すぐ鳴いてくれないか
 君に聞かせむ わが君にお聞かせしたい

⑫ 大伴家持（巻 18・4068）

居り明かしも 夜明かししてでも
 今夜は飲まむ 今夜は飲もう
 ほととぎす ほととぎすは
 明けむ朝は 夜の明けた朝には、きっと
 鳴き渡らむぞ 鳴き渡ってゆくにちがいない



大伴家持像
（高岡二上山）

#6 ドキュメント その5

戦時中、万葉集はどのように使われたか

- (1) 戦地で青春を過ごす若者にとって、「万葉集」はまさに「青春の書」だった。

日本文学者のドナルド・キーンさんは、アメリカ海軍の日本語学校に入学、海軍情報士官として、日本人捕虜を尋問、持ち物検査に当たったが、その時捕虜たちが最も多く持っていた本が「万葉集」だったことを鮮明に覚えているという。

ノンフィクション作家の辺見じゅんさんは「内地の恋人との間で、数字を書いた葉書のやり取りが行われた」という。恋歌の歌番号で互いの気持を伝えあっていたのだ。

作家の阿川弘之さんが、出征の時持って行った一冊の本が「万葉集」の文庫本だった。広島の家は原爆に焼かれ、残った蔵書はこの一冊だけ、今も大事に持っている。阿川さんは、その文庫本を手「内地の友人から送られた万葉集のカタクリの歌の絵葉書に慰められた」と語ってくれた。

- ⑬ 大伴家持（巻 19・4143）

もののふの
やそ おとめ
八十娘子らが
汲みまがふ
寺井の上の
かた か
堅香子の花

たくさんの
乙女たちが
入り乱れて水をくむ
寺の井戸のほとりの
カタクリの花よ



カタクリ

- (2) 一方「万葉集」は、戦時中忠君愛国教育、戦意高揚の道具として使われた。それが、大伴家持の「海行かば」の歌であり、「醜の御楯」（巻 20・4373）など防人の歌だった。軍歌「海行かば」を作曲した信時潔は、牧師の子として生まれ育ち、幼少から賛美歌に慣れ親しみ、この曲を戦死者に対する鎮魂曲として作曲したと言われている。

- ⑭ 陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首 大伴家持（巻 18・4094）

わが大君の 諸人を 誘ひたまひ
良き事を 始めたまいて
金かも たしけくあらむと
思ほして 下悩ますに
鶏が鳴く 東の国の
陸奥の 小田なる山に
金ありと 申したまへれ
御心を 明らめたまい（中略）
嬉しけく いよいよ思ひて
大伴の 遠つ神祖の
その名をば 大久米主と
負ひ持ちて はへし官
海行かば 水漬く屍
山行かば 草生す屍
大君の 辺にこそ死なめ
顔みは せじと言立て

わが大君が人々を仏の道にお導きになり
（大仏建立という）良いことをお始めになって
黄金が果たしてあるのだろうか
お思いになって、お心を悩ませておられたところ
（とりがなく）東の国の
陸奥国の小田郡にある山に
黄金があると奏上してきたので
お心も晴れ晴れとなり
うれしい思いをいよいよ強くして
大伴の遠い祖先の
その名を大久米主と名乗り
お仕えしてきた役目柄
「海を行くのなら水浸しの屍
山を行くのなら草むした屍を
さらしても大君のそばで死のう
わが身を顧ることはしない」と



東大寺大仏

ますらをの 清きその名を

いにしへよ 今のをつつに

流さへる 祖^{おや}の子ども^こそ

大伴と 佐伯^{さへき}の氏^{うち}は (後略)

誓ってきたますらおの汚れなき名を

昔から今のこの世まで

伝えてきた家柄の子孫なのだ

大伴と佐伯の氏は

#7 ドキュメント その6

万葉集には「面白うてやがて悲しき」ドキュメントと謎がいっぱい

(1) 万葉集には、その他当時の世相の断面を詠った面白くも悲しい歌が数多くあり、文字通り、万葉の時代の巧まざるドキュメントとなっている。

例えば、衣を乾す間もないほどの働き過ぎにより自殺した役人 (巻 3・443~445)、蜂のように胸が大きく胴がくびれた、男を惑わせる悪女 (巻 9・1738)、何人もの男たちに言い寄られ自ら命を絶つ美女たち (巻 9・1808~9 他)、^{かわや} 厠^{くそ}の川の尿を食う鮎を食べる身分の低い女たち (巻 16・3828)、人に食べられる蟹や鹿になり替って、その悲しみを詠う乞食人^{ほかひびと} (巻 16・3885~6)、讃酒歌 (巻 3・338~51) と禁酒令 (巻 8・1657)、^{かがい} 嬬歌、いわばセックス・パーティ歌会の風習 (巻 9・1759)、今に伝わる浦島伝説 (巻 9・1740) や竹取翁の物語 (巻 16・3791 他)、何の意味もないナンセンスでシュールな歌 (巻 16・3838~9)、当代一の大事業大仏建立の歌がない不思議 (巻 18・4094) など。

(2) そもそも、万葉集には序文がないため、編集のねらいや成立の経緯が不明で、書名の由来についても諸説ある。(a) 言の葉説、(b) 万世 (代) 説、(c) 木の葉説など。

また、当時日本には文字がなかったので、中国の漢字を用いて「万葉仮名」と呼ばれる独特の表記をしたものだが、今に至るも解説されていない歌がいくつかある。

万葉仮名の読み方の例を上げると……

山上復有山 (いず、出)、馬声 (い)、蜂音 (ぶ)、二々、二二 (し)、十六 (鹿猪肉)、二八十一 (憎く)、古非、古比、古飛、孤悲、孤非、故悲、故非、眷 (恋)

万葉集を代表する女流歌人、額田王の 12 首の内の 1 首は、万葉集中一番の難読歌としていまだ解説されていない。

⑮ 額田王 (巻 1・9) 莫^も意^い國^{こく}降^{くだ}之^の大^{だい}相^{さう}七^{しち}兄^{あに}爪^{つま}謁^{てつ}氣^き 我が背^せ子^こがい^いまたせりけむ^{いつ}巖^{いわ}極^{ごく}が本

(3) 万葉集の代表的歌人柿本人麻呂の生涯は、正史に記録がないことから、謎につつまれたまま。また、万葉集の最終的な編者とされる大伴家持も、青年時代から万葉集最後の歌を読む 26 年間に 473 首の歌を万葉集に残したにもかかわらず、それから亡くなるまでの 26 年間、1 首の歌も残していない等。なぜか？

⑯ 大伴家持の最後の歌 (巻 20・4516)

あらた
新しき

年の初めの

初春の

今日降る雪の

いや重^しけ吉^よ事^{ごと}

新しい

年の初めに

立春が重なった

今日降る雪のように

ますます重なれ、良いことよ



因幡国府跡

#8 エンディング

防人の歌は、忠君愛国の歌か？

- (1) 忠君愛国、戦意高揚の道具として使われた防人の歌。兵士10人の長である火長として、出立の宣誓の音頭をとったとされる「醜の御楯」の歌をみると、確かに典型的な忠君愛国の歌と思えるが、果たしてそうだろうか……

⑰ 今奉部与曾布 (巻20・4373)

今日よりは	今日からは
かへり見なくて	思い残すことなく
大君の	大君をお守りする
しこ みたて 醜の御楯と	つたない盾となって
出で立つ我は	出て行くのだ、おれは



萩

- (2) 防人の歌は、巻20に84首収められている。そして「醜の御楯」の歌を除くと、そのほとんどが、妻や子、恋人、父母など愛する人との別れを歌った情愛に満ち満ちた、素朴で、美しい歌ばかりである。当時の東国の方言も知ることができて、ほほえましい。

⑱ 丈部 稻麿 (巻20・4346)

父母が	父母が
かしら 頭かき撫で	頭を撫でて
幸くあれて	無事でいろよと
けとば いい言葉ぞ	言った言葉が
忘れかねつる	忘れられない
(さき 幸くあれと → さき 幸くあれて、 言葉 ぞ → けとば ぜ)	



ヒオウギ

- (3) エンディング曲～CD「合歓の孤悲」(作詞：東海林良、作曲：青山一、歌：クミコ)

⑲ 紀女郎 (巻8・1461)

昼は咲き	昼は咲き
夜は恋ひ寝る	夜は恋して寝るという
合歓木の花	合歓木の花です
君のみ見めや	主人の我だけが見てよいものか
戯奴さへに見よ	しもべのお前も見なさい



合歓

万葉人が好んだ動物

① 馬	88 首
② 鹿	63 首
③ 猪	15 首
④ 鯨	12 首
⑤ 牛	4 首
⑥ むささび	3 首
⑦ 犬	3 首
(猫)	0

万葉人が好んだ鳥

① ほととぎす	155 首
② 雁	66 首
③ うぐいす	51 首
④ 鶴	45 首
⑤ 鴨	29 首
⑥ 千鳥	22 首
⑦ にわとり	16 首
(蝶)	0

万葉人が好んだ植物

① 萩	142 首
② 麻など	138 首
③ 梅	119 首
④ ヒオウギ	79 首
⑤ 松	77 首
⑥ 藻	74 首
⑦ 橘	69 首
(桜)	46 首

「万葉集」は、万葉びとの心とくらしの「タイムカプセル」

万葉集 巻頭の歌 雄略天皇(巻1・1)

籠^こもよ み籠^{ふくし}持ち
堀^ほ串もよ み堀^ほ串持ち
この丘^のに 菜摘^のます子
家^の告^のらせ 名^ののらさね
そらみつ 大^あ和^れの国^は
おしなべて 吾^あこそ居^まれ
しきなべて 吾^あこそ座^せせ
吾^あをこそ 夫^そとは告^せらめ
家をも名をも

籠もまあ、良い籠を持ち
堀串もまあ、良い堀串を持って
この丘で菜を摘む娘よ
あなたの家が聞きたいなあ
あなたの名前を教えておくれ
この大和の国は
私がすっかり支配しているのだ
私が告げよう
家をも名をも



発行 一紅会
2014. 3. 8